

---

# 無題 - 質問板のことを恋愛で例えた習作 -

茶山ぴよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無題 - 質問板のことを恋愛で例えた習作 -

### 【ノード】

N2853B

### 【作者名】

茶山ひよ

### 【あらすじ】

即興で書きました。よかれと思ってやつたことなのに。思いが通じない虚しさを、恋愛小説にしてみました。ルール違反をしたのはいけないけれど……相手の気持ちを汲むつてのも大事なんじゃないかい?という単純な主題です。

「今日、あなたの誕生日ね。何食べたい？」

女はうきうきと男に問い合わせた。

一人が暮らしてまだ1ヶ月。

一緒に空気を吸うだけでも嬉しかった。

「私のことを選んでくれてありがとう。」

「あなたと出会えたおかげで、いつも楽しいわ。」

「あなたのおかげで私は私の存在意義がわかつたの。」

「そんなあなたが生まれた、記念すべき日だから、私腕をふるわ。」

しかし、女に対して男の返事はそつけなかつた。

「お茶漬けがいい」

「え。お茶漬け？」

「お茶漬け？」

「うん。それ以外食べないから」

男は、新聞を見ながら淡々と答えると、頭をあげた。

その顔には、別に何も意味はなさそうだ。男は本当にお茶漬けが食べたいらしい。

料理が得意な女は少しがつかりした。

「あと、花とかも飾んなくていいから……いいかい。お茶漬け以外は何もつくれなくていいよ」

男は念を押した。

実は、男は……前に付き合っていた女が料理好きで、毎日毎日山のよしに、わけのわからない料理を食べなくてはならず、辟易していたのだ。

ビーフストロガノフぐらいならまだいい。

しかし、ナントカカントカグーラッシとか、カンボジア風ナントカカントカとか男の舌にはビミョーなメニューもあった。

だが、その、前の女の味覚ではそれは『美味しい』という評価以外は許されないのだった。

もし一言でも「俺はちょっと、好きじゃない」といおうものなら、大変だった。

「このナントカカントカは、新鮮な を使って、隠し味の酢が甘味に生きているはずなのよ。火はかつきり5分入れたから半生で絶

妙のはず。

おまけに、ポリフェノールとDHAとコラーゲンがたっぷりで健康にもいいのよ（中略）……だから、不味いはずはないわ！」

かくのうとく、前の女は、論理的な意見をまくしたて男を言いくるめる。

前の女の論理の中では、男の味覚とか感覚はまったく関係ないのだった。

花も……アロマテラピーに凝つてるとかいう前の女のおかげで、男の家はいつも便所の香料を思わせるなんかの花の匂いで満ちていたのだ。

それで男はすっかり花嫌いになってしまったのだ。

男は女を論破するのをあきらめたかわりに、別れを切り出したのだった。

今の女は、そういうことがなくていい。

ちょっと気分やだけど、なだめればすぐに甘えてくる。そんなところも可愛かった。

だけど。誕生日とあれば。

凝つた料理をつくるに違いない。

凝つた料理は、その手間の分、評価しないと納得しないのでは……

男はそれを恐れて「お茶漬けがいい」と言つたのだ。

「なに。華やぎはケーキとシャンパー、生ハムでも買つてくればいい。

そんな計算がある、とは露知らず、

夕方が近づき、女は楽しげにお茶漬けの支度をするべく、買い物に出掛けた。

女は、男の好きなものを知つてゐる。

「お茶漬けなんて言つてたけど、遠慮してるんだわ。きっと。

そう決めると、いろいろ計画をたてる。

あの人、美味しい肉をさつと網で炙るのが好き。大根おろしを添えて。

茶碗蒸も好きだつていつてたわ。だつて、前に温泉に泊まつたとき。朝ごはんに茶碗蒸しが出てきたあの人とのろけそうな顔といつたら……。

女は幸せな記憶に、血らがとろけそうな顔になつてゐるのに気が付かない。

「奥さん、なんかいいことあつたのかい？」

八百屋のオヤジにそういわれるまで夢見いでスキップだつたらしき。

だから、つい要らないのに大根を2本も買ってしまった。

女は、お茶漬けはもちろん完璧に用意するけれど、大根を味がしみるまで煮たもの（これも男の好物だ）、

極上の阿知須和牛（モーツァルトを聞かせて育てるらしい）を網焼きに、

そして男が好きなギンナンだけが入った茶碗蒸し（他の具を先に片付ける速度とギンナンを口に含む速度が明らかに違うから）ををうわいわとしながら用意して男の帰りを待つた。

「お茶漬けだけしか食べないって、言つてたけど、これだったら食べるよね。

女は男が喜ぶ顔を想像して、独りでいても「一二一二」と言っていた。

テーブルの上には「安売り」だつたけど、バラの花も飾つた。

それは、女の頬と同じピンク色だつた。

「ただいまー」

「おかえりなさいーあなたー！」

女は男に飛びついた。

「待つてたわ」

「ケーキとシャンパーコードと生ハム買つてきたよ。乾杯しよう」

男は一流店のケーキと、ブーブクリコ、そしてイベリコ豚の生ハムを手に入れていた。

「本当? 嬉しい」

女は素直に喜んで、玄関からダイニングへと男を先導した。

「お、おまえ。これは」

「お茶漬け。アンドその他いろいろ」

女はおどけた。

テーブルの上には、凝った料理がてんこ盛りになっていた。

「俺はお茶漬けだけでいい、って言つたはずだ」

男は思わずきつい口調になつた。

「何怒つてるの?」

「怒るわ。お茶漬けしか食べないって言つたのに」

女はシャンパーコードの栓を抜きながらその黒田がちの瞳をきょとんとさせた。

間の抜けたタイミングで栓はポン、と音をたてた。

「…せんせん、喜んでない。

男の「ふしつつら」、女はちょっと泣きたくなつた。

「いいか。俺は茶漬けしか食わないぞー約束したんだからな」

あまつさえそんな宣言をへする。

「せんぶ……あなたの好物だと思つて……。つくつたのに」

「今日は、お茶漬けしか食べないつてルールにしただろ、今日は」

「ルール。ルールつて何？

女は体中がカラッポになつたよつた空しさに襲われた。

あんなにわくわくした時間はなんだつたんだろう。

デパートを何軒もまわつて、評判の肉を探したあの夕陽に、女は男の笑顔を見ていた。

カツオのだしで大根を煮込んだ湯気の向こうに、男の笑い声を聞いていた。

男は、女の料理を……まったく手をつけないで……捨てた。

ピンクのバラも「ミ」に捨てた。捨てるときにトゲが刺さつて男はさらに不機嫌になる。

「これから、もつ」

と男は文句を言った。

女の男への気持ちは、津波の逆のようにならめていった。

それは、その後どんなに優しくされても、女は以前のよつて男に献身的にゆくことはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2853b/>

---

無題 - 質問板のことを恋愛で例えた習作 -

2010年10月10日17時58分発行